

# 山梨県における米騒動（1918年）について

深澤 竜人

## 【要旨】

1918年に生じた米騒動に関して、山梨県の状況を知るべく、当地の地方新聞の記事を基にして追究した。まず山梨県での大戦景気による好景気、それとともに生じた物価の上昇、特に米価の高騰、これらの状況と要因について詳解した。その後、山梨県における米騒動として、1918年8月に若尾邸の焼き討ち事件が起きるが、この詳細を示した。またこの後、新聞紙上での分析はマルクス主義的な理解把握が示されていく状況を詳解した。

【キーワード】 米騒動, 山梨県, 『山梨日日新聞』, 『山梨民報』, 『山梨毎日新聞』

## はじめに

本稿では1918年に生じた米騒動に関して、山梨県での状況を詳解していく。

米騒動の発生プロセスに関しては、まず要因から見ておくと周知のとおり、第一次世界大戦（1914年7月～1918年11月）によって日本経済に好景気（大戦景気）が到来し、これによって物価・米価が上昇し、一般大衆が苦慮していたこと。そしてさらにロシアで11月革命（1917年11月）が生じ、これに対して日本がシベリア出兵（1918年8月）を決定したことから、米の騰貴的買占めが横行し、米価はさらに高騰したこと。これらに対して、1918年の7月から9月にかけて、特に富山県の漁村の女性の行動をきっかけに、都市民衆や貧農・被差別民が米の安売りを求めて買占めの反対を求め、米商人・富商・地主・精米会社が襲われて警官隊と衝突した。この事件が米騒動と呼ばれるものである。

本稿ではこれらに関して、山梨県の状況を追究していくものである。山梨県の米騒動に関する先行研究・史料としては、中島ほか（1959）や井上・渡部（1960）がある。本稿はそれらを参考にしながらも、しかし文献・史料としては当時の新聞報道に専ら依拠した。中島ほか（1959）は40年以上経過した回想を含めた座談会であることや、井上・渡部（1960）で用いている「予審終結決定書」も米騒動から数か月後の騒動を起こした当人の口述記録でもある。このため騒動自体の当時の第三者的記録を重視する観点から、直近の新聞報道に着目し依拠した次第である。また本稿で示していくように、新聞報道に依って統一すれば、この米騒動前後の状況、そしてまたそこでの変化が重要であって、これらが如実に把握できるという利点があるからでもある。閲覧できた当時の山梨県の新聞は、以下のとおりである。『山梨日日新聞』『峡中日報』『山梨毎日新聞』『山梨民報』『甲斐新聞』。（いずれもマイクロフィルム版で山梨県立図書館蔵。）

### 1. 大戦景気の様況

まず物価・米価の高騰の要因となった大戦景気の様況に関して、新聞記事から

追跡していくと以下のとおりである。

経済・景況の詳細状況について、比較的多くの記事が載せられている『山梨日日新聞』で確認していくと、第一次世界大戦は1914年の7月に発生したのだが、この当初は山梨県経済に混乱をもたらした。この年の年末になって生糸価格の「少々回復」の記事（『山梨日日新聞』1914年12月22日）が見られ、ここがターニングポイントだったようである。

1915年になって（以下『山梨日日新聞』の月・日順で）、「景気回復曙光」（2.1）、「株式市況順調」（2.24）、「景気回復の兆」（3.9）、「景気回復の原因」（5.13）、「甲斐絹機業回復」（5.30）、「生糸取引改善」（7.27）、「糸価暴騰原因」（11.6）、「糸価と製糸業」で紙価の益々高値模様（11.19）、「糸価暴騰原因」（11.22）、「活気づいた製糸家」（11.26）、「輸出生糸回復」（12.29）、こうした記事が『山梨日日新聞』で見られる。景気は徐々に回復してきたようで、大戦景気の始まりである。物価も一部では上昇し出し、染料の暴騰で染色業者が困っている状況が知れる。また同時に、この後問題となる「売り惜しみ」や「成金」（4.13）なる語もこの時から見られ出す<sup>1</sup>。

1916年になると、「生糸の好況と製糸家」（1.7）、「糸価・物価の騰貴」、「昨今の金融界」として一般商取引の活躍・各種事業計画の続出・一般取引の繁忙（1.24）、「染料暴騰」（1.29）、「洋紙相場暴騰」（2.2）、「鑄物職多忙」（2.10）、「学用品暴騰」（2.15）、「甲斐絹の騰貴」（2.17）、「蚕糸界革新」（3.27）、「養蚕家に注意」（4.2）、「紙類暴騰の趨勢」「甲運貨物の活況」（5.1）、「本年の製糸／仕入れに大警戒を要す」（5.21）、「生糸先約好況」（6.21）、「甲斐絹の盛況」（8.11）、「生糸の活況／現場買気益々優勢」（10.9）、「生糸釜数増加」（11.5）、「物価益々騰貴」（11.26）、「物価がドシ〔ドシ〕騰がる／お台所から苦しい嘆声」（11.27）、「地方製糸家警戒せよ」（12.17）、これらの記事が『山梨日日新聞』で見られる。生糸釜数増加（翌年も）とあるように、この頃には製糸業は完全に拡大再生産に入ったと判断して

<sup>1</sup> 岩波書店編集部編集（1991）224頁では、1916年の12月4日から「東京株式市場暴騰（いわゆる〈大戦景気〉の始まり）」とあるが、山梨県内では1915年中は既に景気の良いが本文のように示されていて、転換点はこれも本文でも示したように、山梨県内では1914年の年末と考えられる。

良いだろう。同時にまた、物価が様々な方面で上がり出しているのが知れる。

以上の景気回復と好況の根本的な要因は、よく知られているように、第一次世界大戦からもたらされた欧州・アメリカへの輸出の増加である。山梨県下では周知のとおり、特産品である生糸や絹織物が特にアメリカへ輸出されていたため、それらの需要がこの時非常に増した。その結果、上記のプロセスや記事が賑わい出したのである。

1917年になると、「本年の養蚕」として優に二割位の増加(1.24)、「若尾製糸現況」として尚ほ三百釜の増釜(2.5)、「座繰製糸発展」(4.30)、「製糸資金と金融」として製糸家の経営頗る順調(5.3)、「春繭と製糸家」として本県に於ても七百釜位の増加(5.26)、「製糸界現状」として夏挽製糸は引続き活気中(6.7)、「生糸相場活躍」として人気は層一層活気を帯び那辺迄昂進すべきか測知し難き状況(6.22)、「製糸家を羨む」として製糸家の去年から今年へかけての儲け高は到底我々の想像処の話でない(6.25)、「座繰製糸活況」(7.17)、「秋繭と製糸家」として高値を以て開始し高値にて終りを告ぐ(7.23)、「糸価の活躍」として生糸成金は続々排出(7.24)、「製糸賃金値上」(8.6)、「製糸原料不足」(9.24)、こうした記事が『山梨日日新聞』で見られる。このように製糸業や養蚕業の活況・好況のほどが知れる。例えば以下のとおりである<sup>2</sup>。

#### 工女需給状況

本県に於る製糸工女需給の状況を調査するに 県内に於る現在の製糸釜数は約一万三千余釜を産し 猶年を逐て増加の傾向在り 他府県に比して工女多数有するが 之一般中産以下の家庭に於る婦女子が製糸技術を習得し居る結果なるも 独県内製糸家に従業するのみならず 長野県を始め埼玉、群馬、

<sup>2</sup> 以下の引用に当たっては、旧漢字体を当用漢字体に改めた個所がある。原文には漢字に振り仮名や、傍点による強調、大文字・小文字の違いがあるが、それは省略した。また、原文の平仮名には濁点があるものもないものがあるが、原文のままとしてある。なお、読みやすさを考えて、引用上一マス開けた個所もある。

また大戦景気の詳細と、これが与えた農家・農村への影響に関しては、深澤(2022c)を参照。またロシア革命とシベリア出兵に関しては深澤(2022d)を参照。

茨城其他の各府県に出稼する者又少からず 随つて工女募集の競争は激甚に行はれ 為めに県内営業者は優良工女の募集に苦心しつつあり [以下略] (『山梨日日新聞』1917年5月30日.)

また1917年から山梨県民に対して、一攫千金をつかむようなおかしな金儲けの話も掲載されてもくる。

「僅か一日で千円の利益／成功致富の近道は株式相場／株の売買は決して危険に非らず」(『山梨日日新聞』1917年4月30日)。

「一代に百万の富を作る決して難事に非ず／株式会社富強世界社専務取締役大迫利亮／予が現に実行しつゝある利殖法／何人にも容易に実行し得る方法」(『山梨日日新聞』1917年5月23日)。

「二百円で千四百円の利益／四十円でも二百五十円儲かる／疑ひ深い人は儲からぬ／顧問高柳淳之介」(『山梨日日新聞』1917年7月26日)。

「安全確実に儲かる／三百円で千八百円の利益」(『山梨日日新聞』1918年8月16日)。

こうして1917年の好況の状況は好景気がかなり一般的になっていたようで、『山梨日日新聞』以外でも、特に年末になって、「歳暮の甲府市況／愈々贈答が行はれる」(『峡中日報』1917年12月22日)、「暮の市況／愈よ活気附く」(『峡中日報』1917年12月26日)、これらの記事が見られる。好景気がかなり一般的になっていたと把握してよいであろう。

1918年の状況として、『峡中日報』に目を向けてみると(以下『峡中日報』の月日順で)、「花柳界の大景気／各興行も亦振ふ」(1.5)、「廓から見た新年の景気／遊郭を設置以来の大全盛」(1.9)、「成金景気／大神宮の節分会」(2.5)、「記録破り廓の景気／勿驚涎賃六万円を算す」(2.6)、「憂ふべき農家の株式熱／一攫千金を夢み質朴の風壊る」(3.14)、「糸価益々騰貴／甲州糸千六百円」(4.30)、「憂ふ可き農村の悪影響／奢侈に流れ勤労を嫌ふ」(5.31)、「成金者流を真似るな／現下農村の景気の裏に恐ろしき亡滅の陰影潜む」(6.28)、などが見られる。またそ

れ以外にも「甲斐絹は益々よい／注文に応じ切れないと云ふ勢」（『山梨民報』1918年7月22日）、これらの記事が見られる。このように景気はかなり過熱してきたようであり、例の「成金」なる用語や景気の良さを伝える用語が頻発している。

さらにこの年、こうした好景気、あるいはその過熱ぶりは、当時の農村にも波及していたことが解るのであって、この新聞は農家・農民に対して注意・警戒を促している。例えば以下のとおりである。

#### 農家と物価騰貴

時局以来物価騰貴に伴ふ生活難の嘆声は都鄙を通じて瀰漫せる有様なるが之れが本県農家経済上に及ぼせし影響を見るに 本県唯一の主産物生糸は約六割方の騰貴をなしたるより 本県農家の約九割を占むる養蚕家の経営頗る潤沢なるは近時産業組合及各種貯金の増加にて証すべく 又他県に比し比較的少き本県小作農の如きも食品の騰貴に鑑み 可及的自給自足の方針を採り売却すべき生産物皆無なりと雖も 労賃及子女の製糸出稼賃の収入あるより寧ろ中産農より裕福にして 愛知愛媛に見る小作同盟の如き其の例皆無にして 地主との関係頗る円満なり 要するに本県農家に及ぼす物価騰貴の影響は生糸の暴騰の続く限り寧ろ樂觀すべき現象なるべし（『山梨日日新聞』1918年6月28日。）

このように好景気の各所への浸透の程が知れる<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> 好景気の記事ばかり取り上げたようであり、そうした指摘とは逆のものもある。例えば1917年からでも、「生糸は好況でも甲斐絹商は苦しい」（『山梨日日新聞』1917年6月9日）、「座繰製糸不味」（『山梨日日新聞』1917年9月17日）、「製糸家の損益」（『山梨日日新聞』1917年9月20日）、「株式大暴落」（『山梨日日新聞』1917年10月27日）、「大暴落／呉服店の小売の大苦境」（『山梨日日新聞』1918年1月11日）、「恐慌の取引所／各地休場の影響で」（『山梨日日新聞』1918年1月29日）、「大工左官の懐に秋風が吹く／材料高く新築は見合せ」（『峡中日報』1918年2月17日）、「不景気が来か来ぬか／襲来した世相が之を裏書き」（『峡中日報』1918年2月24日）、「甲斐絹暴落」（『山梨日日新聞』1918年7月22日）、などである。ただこれらは本文で確認してきた景気

## 2. 物価高の状況

このような大戦景気によって上記示した好景気が山梨県にも到来したのは良いとしても、それによっていくつかの問題もまた生じてきた。既述のとおり、製糸業において女工の募集に苦心するという状況、成金や農村の退廃などの問題、これらもさることながら、大戦景気に伴って現れた社会全般に共通するさらに大きな問題としては、物価の全般的な高騰という問題が顕在化してきたのである。特定の物品に関してその価格が上昇する現象は、既述のように1915年から見られていたのだが、しかし1916年11月以降になってくると、物価の高騰が（全国的にも）完全に問題化してきたようである。

これに関しては新聞記事の表題を追いかけることだけでも解るため、それで確認していくこととする。山梨県内での物価高に苦しむ記事として、(本稿1とのいくつかの重複もあるが、)以下羅列してみると以下のとおりである。

「物価益々騰貴」（『山梨日日新聞』1916年11月26日）。

「物価がドシ〔ドシ〕騰る／お台所から苦しい嘆声」（『山梨日日新聞』1916年11月27日）。

「物価騰貴と予算」（『山梨日日新聞』1917年7月23日）。

「市内の場末町／細民の生活状態／随分悲惨なものである」（『山梨日日新聞』1917年10月10日）。

「塩が払底」（『山梨日日新聞』1917年12月8日）。

「新年を迎へる衣類が騰貴す／昨年に比較して皆高い」（『峡中日報』1917年12月25日）。

「景気の好のは上流のみ／中産以下は反つて不印だ／物価は高いし稼ぎは少し」（『山梨民報』1918年1月12日）。

---

の全般的な趨勢から見れば、一時的なものであったと考えられる。

なお1910年代当時の農村の状況と、こうした大戦景気による変化に関しては、深澤(2022c)において詳しく扱ってある。

「物価騰貴と其影響／小学教員家庭の生活難／甲府場末細民の生活難」(『峡中日報』1918年2月3日)。

「甲府で豆腐殻が能く売れる／生活難の証拠」(『峡中日報』1918年2月17日)。

「物高に脅される細民窟／窮乏は極点」(『山梨民報』1918年2月19日)。

「農村警戒の年柄／養蚕本位の村落／物価暴騰の嘆声」(『峡中日報』1918年2月20日)。

「生活難で質が流れる」(『峡中日報』1918年2月24日)。

「物価騰貴と生活難／体能力の減退が其憂慮する所」(『峡中日報』1918年3月5日)。

「日用品暴騰状況／本県農商課調査に係る」(『山梨民報』1918年3月26日)。

「農家と物価騰貴」(『山梨日日新聞』1918年6月28日)。

こうした新聞記事とは別に、以下では統計資料で物価の状況を認識把握しておきたい。実際の統計資料として表1で甲府市の主だった物価の趨勢を取ってみた。米ほかの物価がほぼ1916年から上昇しているのが解る。これが1918年の米騒動の要因をなしていくのであるが、それに関しては以下本稿の3で扱っていく。

ともあれこのように、新聞記事という史料と県の統計資料、この両方から当時の物価の上昇・高騰に関して確認把握できるのである。

物価上昇の原因については、いくつか指摘されているが、上記との関連で言えば、戦争勃発による特定品目の不足、好景気による様々な需要の増加、それに供給が追いついていかなかったこと、これらが基本的要因であろう。またこの当時、日本でも(あるいは世界各国は)金本制度を採用していたが、第一次世界大戦で一時中断した。第一次世界戦下で日本が金の輸出を停止(「金貨幣・金地金輸出取締令」の公布)したのは、1917年9月12日である。このため1917年9月以前では、日本の輸出の増加、輸出超過による金の流入、兌換紙幣の増発、こうした推移による諸物価の上昇、これらも指摘されている(「物価益々騰貴」『山梨日日新聞』1916年11月26日、「成金者流を真似るな」『峡中日報』1918年6月28日、「米価暴騰」『山梨毎日新聞』1918年8月9日、「米騒動に関する厳正批判(一)」『峡中日報』1918年8月20日)。



表1 甲府市の物価（円）

年	米 (上,一石)	大麦 (一石)	小麦 (一石)	大豆 (一石)	食塩 (40斤)	醤油 (一石)	清酒 (一石)	茶 (百斤)	鱈節 (一貫目)	味噌 (一貫目)
1905	13.75	6.13	10.75	10.80	7.45	22.13	35.00	42.00	4.60	40.00
1906	18.63	6.23	8.00	10.00	7.43	24.00	42.50	35.00	4.75	0.40
1907	20.50	6.74	8.25	10.25	7.60	31.75	47.25	38.75	5.38	0.43
1908	19.32	6.92	8.83	8.90	7.76	34.35	50.00	45.00	5.00	0.40
1909	16.68	7.23	10.33	7.83		35.00	50.00	44.00	5.29	0.40
1910	16.93	6.75	11.19	9.00	1.13	35.00	49.00	45.00	6.63	0.35
1911	20.55	6.90	10.83	9.94	1.08	35.00	50.00	47.50	5.31	0.35
1912	25.78	8.93	11.18	11.62	1.02	35.00	50.00	54.00	6.07	0.37
1913	25.63	10.61	12.26	11.70	1.03	33.63	57.50	54.00	6.08	0.40
1914	18.52	5.50	11.93	11.85	0.96	34.00	50.00	54.00	6.50	0.37
1915	14.70	4.72	11.00	10.75	0.95	32.00	47.00	54.00	6.63	0.40
1916	16.48	5.65	10.93	12.25	0.97	32.50	52.50	64.50	6.50	0.40
1917	25.13	8.50	13.58	16.25	1.08	35.75	62.50	66.75	7.13	0.44
1918	36.50	15.70	21.75	21.83	1.26	41.75	80.00	86.00	9.50	0.58
1919	49.13	18.15	23.95	23.50	1.43	60.50	125.00	100.00	12.00	0.88
1920	39.63	15.95	18.38	20.38	1.90	77.50	142.50	120.00	15.25	1.13
年	鶏卵 (百個)	牛乳 (一升)	和赤砂糖 (百斤)	紡績綿糸 (百斤)	繭 (一石)	生糸 (上,百斤)	石油 (二罐)	石炭 (一噸)	薪 (十貫目)	炭 (十貫目)
1905	2.70	50.0	15.00	41.60	55.00	965.75	3.50	4.75	25.00	65.00
1906	2.55	0.50	14.00	38.41	52.60	1,000.00	3.50	4.90	0.25	0.66
1907	3.25	0.50	14.38	38.63	50.63	1,150.00	2.75	5.25	0.30	0.81
1908	3.25	0.50	15.00	38.50	45.00	895.00	4.20	5.40	0.29	1.00
1909	3.50	0.50	14.70	40.25	43.25	987.50	3.80	3.25	0.30	1.00
1910	3.05	0.55	14.50	33.38	41.50	925.00	3.83	10.85	0.39	1.00
1911	2.81	0.50	16.31	33.20	39.25	892.50	3.80	9.43	0.36	0.95
1912	2.70	0.50	17.65	40.66	42.75	900.00	3.81	8.00	0.44	0.95
1913	2.50	0.45	17.46	34.45	51.75	951.25	4.08	9.93	0.42	1.04
1914	3.13	0.40	14.83	37.02	47.00	921.50	4.32	8.71	0.45	0.93
1915	3.25	0.40	18.25	101.25	42.50	887.50	4.23	8.50	0.44	0.90
1916	3.00	0.40	22.00	123.30	71.00	1,337.50	5.74	10.53	0.48	
1917	3.50	0.48	27.75	165.00	73.75	1,522.50	6.08	17.75	0.62	
1918	4.38	0.60	25.50	113.15	67.50	1,515.00	10.18	25.29	0.80	
1919	7.25	0.80	43.00	139.20	126.50	2,330.00	11.78	46.48	1.34	
1920	9.00	1.20	45.00	127.75	90.33	2,265.00	10.68	30.50	1.65	

資料出所：『山梨県統計書』各年版。空欄は統計なし。なお、味噌、牛乳、薪、炭については位取りの修正が1906年まで遡求してなされているが、1905年は修正されていないため、そのままの数値としてある。食塩については修正はなされていないため、そのままの数値である。

### 3. 米価高の状況と要因

#### 3-1. 米価高の状況

景気の過熱、物価の高騰、こうした問題が発展する中で、一般大衆にとって特に苦しめられたのが米価の高騰であった。既に1917年5月28日の『山梨日日新聞』において、米の供給不足と米価暴騰・奔騰の記事が出だす。その後はいわゆる鰻登りの状態であった。表1で確認しても、米の価格は1915年から1919年にかけて3倍以上も値上がりしている。

物価の高騰あるいは米価の高騰によって特に苦しめられたのが、いわゆる「月給取り」や細民であった。彼らにおいては収入の上昇よりも物価・米価高騰の方が問題が大きく、これは大きな社会問題になっていた。これらに関して、新聞記事の表題で何う限りでも、以下のとおりである。

「米価調節法如何／当市某米穀商談／農家の貯蔵米は多い／出荷薄は売惜みの為め／外国米輸入は調節の一法／関税を免除するが肝要」（『山梨民報』1918年2月13日）。

「米価暴騰と生活難」（『山梨毎日新聞』1918年7月29日）。

「米価と生活」（『山梨日日新聞』1918年8月4日）。

「県下の在米はどう？／農家の貯蔵米は案外に少なく商人の持米が多い」（『山梨民報』1918年8月5日）。

「英断の必要迫れり／甲府小売米穀商の哀訴」（『峡中日報』1918年8月8日）。

「米価と生活難／桜井市助役語る」（『峡中日報』1918年8月8日）。

「米価制限最急用也／荒川渉」（『山梨日日新聞』1918年8月9日）。

「米価暴騰」（『山梨毎日新聞』1918年8月9日）。

「生活費と一般の生活費／米価を始め諸物価／暴騰の影響如何」（『山梨日日新聞』1918年8月9日）。

「市会の研究／米価と細民」（『山梨日日新聞』1918年8月10日）。

「米価と農村」（『山梨日日新聞』1918年8月15日）。

この中の一例を示すと、以下のとおりである。

物価騰貴の影響／お払い物も高くなる

物価騰貴の為に細民や安月給取はどの位苦しめられてるか知れない 殊に米価の暴騰は安月給取の致命傷で収支償はざる 晦日の勘定に仕事も碌々手に付かぬものが少なくない [以下略] (『山梨日日新聞』1917年7月14日.)

物価騰貴と其影響／小学教員家庭の生活難／甲府場末細民の生活難

米価暴騰の為め惨めな目に遇つてゐるのは一般中流階級の主人公計ぢやない、苦しい生活をしてゐる事は可憐な小学校生徒の昼のお弁当にまで影響して甲府市内各小学校生徒の中には学校へ弁当を持つて来ぬ憫れなものもあると云ふ [以下略] (『峡中日報』1918年2月3日.)

暴利を貪る谷村町の米穀商

三車の外米も今は既に品切れとなつたのでも知れよう 殊に月給に衣食するものや細民給のものは全く米麦の資すら得られない悲惨の状態にある [以下略] (『山梨民報』1918年8月11日.)

同様な報告はこのほかに、「市内の場末町／細民の生活状態／随分悲惨なものである」(『山梨日日新聞』1917年10月10日)、「物高に脅される細民窟／窮乏は極点」(『山梨民報』1918年2月19日)でも紹介されている。

このような状況下、政府あるいは山梨県はいろいろな方策を講じている。米の輸出禁止、外米の移入、輸入米の関税引き下げ・撤廃、細民への給付、等々であつて、しかしこれらは検討段階で終わったものや実行されたものもある。しかしそれによつても効果は薄かつたわけである。

### 3-2. 米価高の要因

こうした米価高騰の要因をここで検討しておくこととする。本稿上記2で示し

た物価高騰の要因に加えて、本稿のはじめにて紹介した米価の上昇を見込んだ投機的野心が各所で出だし、商人や農家にあっても米を売り惜しみ出したこと。さらに 1917 年にロシアで 11 月革命が生じ、世論としてシベリアへの出兵が言われ出し、政府もそれを検討し、ついに決定したことも加味して、(1918 年 7 月 12 日の臨時閣議で政府は出兵を決定、8 月 2 日に寺内内閣による「出兵宣言」の発表、) 米の騰貴の買占めが横行したこと。これらによって市場で米が欠乏する事態となったのが主要な要因である。地方あるいは山梨県においても、それらを示すいくつかの記事を確認していくと、以下のとおりである。

まず農家が米を売り惜んでいるという指摘は、

#### 農家思惑弊害

米価の昂騰甚だしく漸く県下に於ても生活難の声高まらん傾向あれば 此際 県当局は相当米価調節の善後策を講ずる必要あり 地方農民の実際を見るに一般に堅実なる気風廃れ 稍もすれば投機的野心を抱き所有の米穀を思惑の具に供せんとする悪弊著し 即ち農家は近來の米価昂騰が殆んど無限に騰貴するものと見做して一斉に売惜しみを為し 往々市場に米の欠乏を見る事あれば 米価調節は商人よりも寧ろ農家を取締らざる可らざるの奇観を呈するが如き事あり [以下略] (『山梨日日新聞』1918 年 3 月 14 日.)

などに見られる。しかしこれについては、その後山梨県の調査が行なわれ、それによると農家は既に米は米商人に売ってしまい、米商人が米の高騰を見込んで売り控え、これによって米相場が高騰しているという、以下のような指摘がなされている。

県下の在米はどう？／農家の貯蔵米は案外に少く／商人の持米が多い

本県ににては其筋よりの命令に依り 目下各都市に付十石以上を所持する農家の在米を調査しつゝあり 其調査の方法は郡市長より町村長に依頼し 町村長は各戸に付綿密なる調査を遂げ郡役所に報告し 郡より来る七日までに右の報告を取纏めて県庁に報告し 県に於ては之を十日までに其筋に報告す

ること、なり居れるが右に就て聞く處に依れば 始め豪農側に於て相場の更に奔騰すべきを見越し売惜みの態度を執り相当の貯蔵米あるべきものと思惟し居りたるに 既に是までの相場が空前の高値を示したること、之れ以上の昂騰を叫ぶが如きことはあらざるべしと見限りを付け 大概是売り払ひて所有せず 若しありとするも开は自家の食糧を幾分豊に見積り居る位に過ぎず 又倉庫に多量の貯蔵米ある向あるも是等は孰も商人に売り払ふて単に保管をなしつゝあるもの多き模様にて 豪農以下普通農家にありては固より多数の余裕もなければ曩の高値を示したる際持堪へずして 大部分売り盡し残存し居るは僅に上記の如く豊に見積りたる食〔糧〕に過ぎざるが 之由も昨今の天井知らずの高値に遭ひ 農家にては再び驚きを得て四五日前より一旦豊に見積りたる一家の主食を制限して極く少量に切り詰めその残部を売り払ふ 一方に於て外米を買ひ入れ在米と混和して日常の食料に充つる等一般經濟上深き注意を加ふるに至りたれば 農家自身の所有米は案外に減じ 多く仲買人及穀商の手に移り 是等商人は今後更に米相場の暴騰すべきを見越して 此際暴利を獲得せんものと一切売り控へ居れば 目下の處相場は商人の手に拠つて勝手に昂上せしめられつゝあるもの、如し（『山梨民報』1918年8月5日。）

このように、農家の方では米価が高くなったので米を売り払い、倉庫にあるとしてもそれは仲買人か穀物商人が買い取ったものであって、この仲買人や穀物商人が今後さらなる米価の上昇を見込んで、暴利を得ようとして米を売り控えている、これによって米相場が高騰している。とこのような指摘である。県などの調査報告のようであることから、おおよその信憑性はあるものと考えられる。

しかし、ただ米商人の方も状況は様々のようであり、別な新聞報道では甲府市の状況について次のような指摘がなされている。米商人といっても米の卸売りや小売り米穀商などいくつかのものがあ、り、小売りの米穀商に米を供給するはずの卸売り・問屋・水車業者、彼らが米相場の高調によって一攫千金を夢みて、その持ち米を容易に売り放たず、小売商の足元を見て益々人為的に高相場を作って、小売商を苦しめている。これによって小売商は毎日のように山梨県の農商課に出

頭して、善後策を哀訴嘆願している。と、こうした指摘も見られる。（『峡中日報』1918年8月8日。）同紙には「其内部に渡りて嚴重なる調査を遂げて斯かる事実ありや否やを吟味した上で」（同前）とあるが、実際の嘆願であるから、米の小売商人側の実情であると考えられる。

何しろこのような背景と状況下において、全国的な米騒動が生じたのである。

## 4. 米騒動

### 4-1. 米騒動の全国的な把握

米騒動に関しては、富山の主婦の騒動から発展したことが有名であるが、当地では米価昂騰による生活難によって、時期的には1918年の7月から、移出米の積み出し停止要求や、施米に漏れた細民の市役所への押し掛け、窮状の訴えなど、散発的な事件が起きていた（Wikipedia）。その中で特に有名なのが、8月上旬に起きた「女一揆」であった。これに触発されてか、全国各地で都市民衆や貧農・被差別民が米の安売りを求めて、買占めの反対を求め、米商人・富商・地主・精米会社が襲われて警官隊などと衝突し出したのである。

山梨県で富山の一件について紹介したいいち早い新聞記事としては、「米価暴騰と女一揆」（『峡中日報』1918年8月9日）、「米価暴騰」（『山梨毎日新聞』1918年8月9日）である。その後、本稿「はじめに」で紹介した山梨県内の各種新聞紙上で取り上げられている。1918年8月11日の『山梨民報』では、簡単に以下のとおり紹介している。

富山市に飛火／女一揆大挙市役所に押寄す／富豪を歴訪し形勢不穩

先頃来滑川其他に米暴動起りたるが 更に富山市特殊部落の貧民女房連四十余名は八日午前八時市役所に押掛け生活難を訴へ救助方を嘆願せり 折柄市長助役不在なる為め太田庶務課長に面談し 其れより市内の一二の富豪を歴訪し同様嘆願せるが 野次馬の助之に附和雷同し却々の騒ぎなりき 尚不穩の形勢あり（富山電報）（『山梨民報』1918年8月11日。）

米騒動はその後全国各地で生じることとなったのであるが、当地・山梨県の新聞記事で確認する限りでも、京都、東京、名古屋、大阪、愛知、広島、兵庫、福井、岡山、香川、宮城、三重、これらの都府県で一揆に似た現象の発生が確認できる。『山梨日日新聞』1918年8月21日の「地図の上から見た米騒動」によると、結局のところ「三府一道十県／全国過半に亘る」となっている。

事態を重く見た政府は、8月14日に米騒動に関する一切の記事掲載を禁止し、その旨を各所に（山梨県にも）電報にて通達した。そのため一時米騒動に関する記事が掲載できなくなっている。その後、8月17日内務省の公表したものに限りて解禁され、8月18日に甲府警察署より公式の通告がなされた（『山梨日日新聞』1918年8月19日）。

山梨県の甲府市などにおいては、この間に騒動が生じたのである。

#### 4-2. 山梨県での米騒動（甲府市での若尾邸の焼き討ち事件ほか）

山梨県内における米騒動の事件として、一番大きなものは8月15日の夜、甲府市山田町ようだまちに生じた若尾勤之助（1882～1933年、若尾逸平を初代とするとそれから三代目）邸宅の焼き討ち事件である。ただこれに先立つこと数日前に、谷村・大月で以下の騒動が生じている。それらを掲載した新聞報道から要約すると、以下のとおりである。

谷村町では8月11日の夜、ある者が「群民を警告す」と題したピラを大月・谷村の要所要所に張り、その内容としては三名の商人の名を挙げ、彼らはいずれも数百石の米を貯蔵しながら売惜しんでいる旨を告げ、速やかに原価で提供せよ、「然からざれば最後の手段に出づべし警鐘一打群民は某地に集まるべし」というものであった。これによって警察より関係者に嚴重警戒、召喚注意が与えられた。（「谷村町の形勢不穩」『山梨毎日新聞』1918年8月14日、「大月にも米の叫び」『山梨民報』1918年8月14日、「時局の打撃から悪戯を為す／郡内穀商の警戒」『峡中日報』1918年8月14日、「不穩の貼紙をした男／猿橋署で検挙す」『峡中日報』1918年8月15日。）

大月駅では 8 月 15 日夜、500 ～ 600 名の群衆が集まるが、警察の警戒により無事。（『大月駅』『山梨日日新聞』1918 年 8 月 18 日。）

こうした中、甲府市でも 8 月 15 日に若尾邸焼き討ちが生じるのである。これに先立って 8 月 11 日の『山梨毎日新聞』には以下の記事が掲載されている。

若尾倉庫に二万俵／窮民の生血を啜りて私服を肥す／買占め売惜みの奸商を退治せよ

米価の天井知らずの暴騰は各地一帯であるが 本県の如きは米の不足の為に暴騰するのではなく商人の買占と農家の売惜みの結果であるから 此貯蔵米を庫を開いて売出せば必ず下落するに限つて居れども 此れ強圧的に売出せと云ふ事も出来ぬと云ふ足元を見込みて陰で舌を出して居ると云ふ奸商のあるに至つては憎みても余りあり 現に若尾家の貯蔵粃は二万俵程今春当市金手町阪本豊甫 松島村一條一の二人名義にて一俵九円の価格にて買取り既に金品は取引したる儘今に至るも 倉庫に積込んだる儘引取らず 当時九円に買入れたのが現に十四五円に暴騰したれば一俵に就て四五円の利益あるにも拘らず猶騰貴を見込みて引取らぬに 若尾家にてはこの節柄非常に迷惑なれば一日も早く現物を引取りたしと迫りても頑として応ぜらるも 其実は前記の阪本一條兩名の名義にて買収したる裏面には他県より入込し某商人の出金にか [か] るため二人とも自由にならず 今猶其儘なりとは憎みても余りある奸商共と云ふべし （『山梨毎日新聞』1918 年 8 月 11 日。）

このようにこの新聞紙では米穀商の実名と所在地を挙げて、まさに糾弾している。この記事を山梨県民のどの程度の者が読んでいたのか、あるいはこうした状況や知識をどの程度持っていたのか、そしてまたこの後に起こる若尾邸の焼き討ちとどの程度の関係があったのか、これらについて知る由はないが、こうした記事が掲載されていたというのは事実である。

そしてまた、この後に発生する若尾邸焼き討ち事件と関係する以下の記事がある。



市民大会開かれん／有志が寄々協議中

甲府市の有志数名は米価問題に関して市民大会を開催すべく、十二日夜市内百石町龍華院に於て之が相談会開き種々協議を遂ぐる所ありしが、其結果昨日午後一時甲府市役所に名取市長を訪問し、細民の救助方法に就いて意見を述べ引取りたるが、尚昨夜更に龍華院に相談会を開き、其上にて来る十五日舞鶴公園内に市民大会を開催すべしと云ふ。（『山梨毎日新聞』1918年8月14日。）

この8月15日舞鶴公園で開催された市民大会の同日の夜に、若尾邸の焼き討ち事件が起きるのである。ただこの市民大会事態は上述から察するに、有志者によって米価問題や細民の救済方法を協議するものだったと考えられる。しかし以下見るように、その後群衆が続々と集まり、そこで若尾邸を襲うべしとの叫びが出、それに呼応して事態が発展していったようである。

では、その若尾邸焼き討ちの模様に関して、本稿「はじめに」で紹介した山梨県内の各種新聞報道から、ほぼ共通する項目から事件の推移を追って見ていくと、以下のとおりである。（数値には若干の異同があるため、最小値から最大値をとってある。）

1918年8月15日20時頃から甲府市舞鶴城公園に集まった市民約60～70名の一団が漸次数を増し、約300～500名の群衆となり、喧騒を極めた。

警察署から不穏な形勢ありと認められ、直ちに解散を命じられた。

群衆は転じて更に太田町公園に集合。この際に道々で群衆が加わり、たちまち3,000～4,000名に増加。

太田町公園に到着するや、2・3の者が米価暴騰・富豪の横暴に対する演説をなし終わると、誰言うとなく若尾邸を襲うべしと叫び出し、同時に一同鬨の声を上げ、23時頃若尾邸に押し寄せた。

若尾邸では家人は避難。若尾邸には誰もいなかったという記事もあるが、店の店員あるいは店出入りの職人と群衆との抗争を詳しく綴る記事が見られる。

邸宅は群衆の放火によって大火となる。翌日2時頃までに土蔵の一部を残して灰燼。

この間に甲府四十九連隊より多数の兵士が出動し、兵士1～13名・巡査3名・群衆13名が負傷。

3時頃に群衆は三々五々退散する。しかしこの騒動を奇貨とした略奪・窃盗などが市内数か所発生。

暴動嫌疑者として37～43名が引致取り調べ中。

これが甲府市で起きた若尾邸焼き討ち事件の詳細である。なおこの後、塩山でも若干の騒動が生じている。同じく新聞報道から要約すると、以下のとおりである。

塩山駅では8月16日の夜、非常なる群衆が集まり、なかなかの騒ぎとなって、やや陰険の模様となった。17日の夜は数百名が集まり、米穀商の家に悪口し投石する者が出た。店頭「本日より白米一升三十銭」という貼り札を出したのを見て、18日午前1時頃事なく群衆は散じた。（『塩山駅の群衆』『山梨日日新聞』1918年8月19日、「塩山駅の其後」『山梨日日新聞』1918年8月20日。）

以上が若尾邸焼き討ち事件ほか、山梨県で生じた米騒動に関する騒動に限った詳細である。

このように山梨県では、谷村・大月・甲府・塩山の順で騒動は生じたのである。これらは他の市・地域に触発・呼応して発生したものではなく、米価騰貴・食糧難・米の買占め・売惜しみ、これらに憤った当地の群衆による自然発生的な性格のものであったと考えられる。既述のとおり、米騒動に関する新聞記事は8月14日から17日の間、掲載が禁止されていた。そのため山梨県民は県内で起きた上記の騒動に関して、当該地の大衆は新聞報道では他地域の状況は熟知できなかったと考えられる。話は人づてに広まったと察するところであるが、一連の騒動は他地域のものに触発され・呼応した計画的なものではないと、上記の検討か

ら認識・判断して良いであろう。

さらにまた、この前の年1917年11月にロシアで11月革命が生じているが、やはりこれに触発・呼応したものではないと上記の検討から考えられる。（ロシア11月革命そのものについての山梨県における当時の理解・把握に関しては、深澤〔2022d〕にて詳しく示してある。ただこの点に関しては、本稿の4-3の②以降でもう再度触れていく。）

#### 4-3. その後の展開① 騒動自体の沈静化要因

ではその後、事態はどのように推移・展開していったのか。これについて以下見ていくこととしたい。

最初の対象として、こうした山梨県の米騒動それ自体は、どのようにして沈静化し終息していったのであろうか。これに関して以下示していく。まず群衆による既述の焼き討ちや投石という騒動は、上記のように困窮した大衆の一時的爆発に類した騒動であったため、一揆的な騒動現象はすぐ沈静化した。甲府市では既述のとおり、若尾邸の焼き討ち事件の直後に略奪や窃盗行為が生じ、その後の2・3日市内は警戒による萎靡停滞ムードとなった。しかし、「花柳界復活」（『山梨日日新聞』1918年8月19日ほか）とあるように、その後こうした雰囲気は解消していった。

それに関して大きな役割を果たしのが、新聞報道で何う限りでは、山梨県内各地で篤志者による米や金の寄付行為、そして官民を問わずの米の廉売が、非常に広範囲で行なわれたことである。（寄付金は若尾邸焼き討ち事件以前にも、以下のとおり若尾勤之助自身からもなされていたのであるが、それでも既述の事件となってしまったのである。）こうした山梨県内の篤志者による米・金の寄付行為、米の廉売に関して、同じく新聞報道から（『峡中日報』『山梨民報』に限っただけでも）列記していくと次のとおりである。

「若尾家の美拳／細民救助の爲め市へ一万円提供」「富豪競ふて義拳／更に救済的義拳」（『山梨民報』1918年8月13日）。

「甲府材木商の美拳／雇用職工に廉売で供給す」（『峡中日報』1918年8月13日）。

「細民救済と米廉売／甲府市会の協議会開かる／巧緻より拙速主義を採る」  
「更に加はつた救済義金／市の細民救助策」  
「米価暴騰に就き有志者会／救済廉売と一致」  
「根津嘉一郎氏一万円を寄付」（『峡中日報』1918年8月14日）.  
「救済義金の寄付益す加はる／更に二千元申込」  
「芸妓屋組合の車夫救済」  
「坂本豊甫が白米八百俵を提供した／時価十六円六十銭の白米を金十二円で市へ廉売方を託す」  
「白米原価廉売／共済信用組合で」  
「米商の廉売協議」  
「韭崎の米価値下／一石に就き四円」  
「谷村では一升四十五銭／穀商組合協定／米価騰貴救済策」（『峡中日報』1918年8月15日）.  
「廉売券頒布方法」（『山梨民報』1918年8月15日）.  
「本県救恤方針決定」（『峡中日報』1918年8月16日）.  
「県の救済方針実行」（『峡中日報』1918年8月17日）.  
「芸妓屋の義金／更に個人で寄付」  
「義金寄付益す加はる」（『峡中日報』1918年8月18日）.  
「谷村町の其後の寄付者」  
「峡南各地の廉売／鰍沢増穂の有志者／寄付金数千円に達す」（『山梨民報』1918年8月19日）.  
「北都留の救済」（『峡中日報』1918年8月22日）.  
「救済義金寄付／篤志家より市へ」  
「峡東富豪の義金／大森家と網野家」（『峡中日報』1918年8月23日）.  
「篤志家の施米／中元の見舞とし村内細民十数戸へ恵贈」（『峡中日報』1918年8月24日）.

このような義援金や米の廉売の記事は、この時非常に多く見られる。こうした新聞報道によって、事態の沈静化を図ろうとしたのかと思われるくらいである。あるいはまた山梨県での米騒動や若尾邸焼き討ち事件の衝撃が大きかったのか、さらには自身が奸商や買占め・売惜しみ側だと思われたくないためか、逆に山梨県民の憐憫の情がかほどに厚かったのか、これらはここでは判断できない。

また当該年の1918年は8月下旬になると、米の大豊作の報道が以下のように聞かされたため、あと1・2か月待てば米の収穫期となり、米の値段も下がるだろうとの思惑から、これらによっても山梨県民・大衆は安心を得たと考えられる。

「近年稀な大豊作／貯蔵米は投出せ」（『山梨民報』1918年8月13日）。  
 「稲は豊作」（『峡中日報』1918年8月13日、『山梨日日新聞』1918年8月19日）。  
 「予想五千六百万石／平年作より四分増収」（『峡中日報』1918年8月20日）。  
 「今年の稲は発育良好／大豊作の見込／米価低落せん」（『山梨日日新聞』1918年8月21日）。  
 「米作予想／五千八百万石」（『山梨日日新聞』1918年8月27日）。

しかしその後の物価はようになっていったのかを見ると、本稿の表1で確認する限りでも、米の値段はもとより、諸物価は1919年まで上昇していくのである。（この点に関しては、本稿の対象外の事象なので、本誌次号以下で取り上げて示していく。）

#### 4-4. その後の展開② 米騒動に関する新聞紙上での分析と論評

米騒動という、いわば一揆的現象がそれも日本国中で生じたため、これは有識者ほかに衝撃を与えた。そして、ではどうしてこのようなことが起きるのか、その要因を分析・研究する動き、さらにどうすれば未然に防ぐことができるのかという対応策を講じるための考究が、この後新聞紙上でもなされてくるのである。以下ではそれらを見ていくこととする。

まず衝撃のほどや要因の分析や追究の一つとして、米騒動という一揆的現象と、その前年（1917年）ロシアで生じた11月革命、この二つの親近性・類似性を有識者はまず感じ取った。例えば米騒動が富山県で発生した直後、山梨県において以下の指摘がなされた。

##### 米価暴騰と女一揆

[前略] これ開戦時代に於ける、独露出征者の留守居の女房達が『麴麩を与へよ、然らずんば夫を還せ』と絶叫したと同様悲惨の極である、斯かる酸鼻の事件が今尚平和の温かき夢を貪つてゐる我領土内に起らうとは、平和の温かき夢を貪つてゐる丈け、その丈け吾人の夢には思はなかつた處である [中

略、山梨県には幸いにして未だこうした現象はないが] 若しも米価暴騰の勢ひにして今少し継続せんには、一般労働者の女房達も亦彼の東西水橋町の例に倣ひ、或は女一揆を起すかもしれない、又巡查や下級俸給者の同盟罷業が起るかもしれない、甚だ寒心すべき事である。(『峡中日報』1918年8月9日.)

このように「起るかもしれない、甚だ寒心すべき事」が、しかし現実には山梨県でも既述のようにして生じたのである。かような山梨県での騒動は、関係者ほかに広くさらなる衝撃を与えたことであろう。

事態のさらなる推移・展開として、ではこうした騒動の再発を未然に防ぐにはどうすべきか、そのための社会的・経済的な要因分析、そしてそこから得られる対処方法が考究されていったわけである。そうした分析あるいは対処方法の主張に関する論説・記事としては、以下のものが見られる。

「根本を誤た金溜主義の祟り／何でも彼でも国外へ売払つて金に替へた／騒擾は政府不明の罪／三宅雪嶺」(『甲斐新聞』『峡中日報』1918年8月18日)。

「応策刻変／市民共助せよ」(『峡中日報』1918年8月20日)。

「米騒動に関する厳正批判(一～三)／東京花田生」(『峡中日報』1918年8月20～24日)。

「暴動研究」(『峡中日報』1918年8月22日)。

「擾乱は不平の具体化／己を憤まざる成金輩」(『峡中日報』1918年8月23日)。

「暴動に呪はれた若尾家／最大原因は所謂貧富の懸隔」(『峡中日報』1918年8月24日)。

「暴動と根本問題(一～三)／峡東花鳴生」(『山梨日日新聞』1918年8月24～27日)。

「善後策／甲府市騒動の」(『山梨民報』1918年8月26日)。

「食料運動と社会組織／藤野稔(上・下)」(『山梨日日新聞』1918年8月27～28日)。

「主張機関／暴動の教訓(上・下)」(『峡中日報』1918年8月28・29日)。

「食糧問題の解決／某医学博士談」(『山梨日日新聞』1919年10月10日)。

主張は無論様々である。政府の無策を訴えるもの、成金をやじるもの、市民の相互協力を訴えるもの、いろいろである。が、上記にかなり多く共通する分析・主張が見られる。それは、騒動や焼き討ちはまずいとしながらも、細民・窮民に寄せる憐憫の訴えであったり、彼らに同情し、かような行動に出なければならなかったやむを得ざる仕儀であったこと、こうした指摘がかなりある。つまりは成金や金持ちまた奸商が騒動に巻き込まれたことに同情することよりも、細民・窮民に同情する指摘・主張の方が強いのである。

そして上記の中で共通する分析・主張として、特に筆者・深澤が着目したいのは、この米騒動の後とりわけ「階級」という用語をもった分析と主張が多々見られるということである。この点に関して、項を改めていくつか拾い上げてみる。

#### 4-5. その後の展開③ 米騒動に関する新聞紙上でのマルクス主義的な分析・把握

それは以下のとおりである。

暴動と根本問題（二）／峽東花鳴生

[前略] 彼等[米騒動を起した群衆]をなして斯くまで熱狂せしめたる根本的原因は何ぞや、吾人は是を社会的不平の爆発、下層社会に鬱積せる反感——上流乃至資本階級に対する——なりとなす、[中略]

顧ふに世界戦乱の齎したる我国の経済的地位は莫大なる利潤を獲せしめたりけれども其富や其利潤は悉くこれ資本階級の独占する所となり、延びて物価の騰貴を促したる結果、常に労力を負担せる下層階級は利潤の分配に与らざるのみならず却つて之が為に苦しめられたる[る]状態に立到りたり、「以下略」(『山梨日日新聞』1918年8月25日。)

善後策／甲府市騒動の

[前略、今回の甲府市の騒動は] 甲府市貧富の衝突、労働者と資本者の暗闘的破裂と云ふべきもの [中略]

甲府市の富者階級及び資本者階級が、余に主我的で公共的觀念の欠乏する結果、遂に経済的弱者の不平を増大したるからである [以下略] (『山梨民報』1918 年 8 月 26 日.)

食料運動と社会組織 (上) / 藤野稔

[前略] 今次の食料運動に於て純然たる階級闘争の色彩を帯び来つた [中略] 純然たる階級闘争が展開されたのであつて国民の須らく顧慮留意を要する所である、[中略]

食料運動は不完全なる社会組織の破綻であり暴露であると言はねばならぬ、即ち従來の社会組織は必然的に破綻さる可き運命にあつてそれが具体化されたものが今次の食料運動であるのである、「以下略」(『山梨日日新聞』1918 年 8 月 27 日.)

主張機関 / 暴動の教訓 (上・下)

[前略] 今回の騷擾を以て富者と貧者との間に起るべき一種の階級戦であると為す事に就ては、多くの識者は其見解を一にして居る、[中略] 資本家階級と労働者階級とは経済上の利害が背反するものある事は云ふまでも無い、故に此の利害相反するものは、其自然に放任し置かば必ずや闘争を演出する事は明白なる理路である、[中略]

自由主義に囚はれたる、資本主義万能の経済組織の弊は、今や貧富の懸隔をして益々甚だしからしめ、富めるものは益々富み、貧しきものは益々貧しからしめんとし、且つ又凡ての施設は此の資本者階級を基礎として案出されるのみ [以下略] (『峡中日報』1918 年 8 月 29 日.)

見られるように、上記の分析・主張は現在にも通じるものがあるため、非常に興味深い。例えばそれは、自由主義に囚われた資本主義万能の経済組織の弊が、貧富の懸隔を益々甚だしくさせ、富める者は益々富み、貧しい者は益々貧しくなる。つまり富・利潤を資本階級が独占する。こうした指摘であつて、昨今の新自由主義の問題点として、今日も多々指摘されているところである。



そして筆者が着目したいのは、以上の新聞各紙の分析と主張が、マルクス主義の分析と主張を多分に表しているところである。例えばそれは、上述だけでも、富・利潤の資本家階級の独占、それによる貧富の差が拡大していくという把握、それに加えて経済的弱者の不平が増大し社会的不平が爆発していく論理、さらにはまたそれらによって同時に、上流ないし資本階級に対して下層社会に鬱積せる反感は増大して、やがて階級闘争になって展開していく論理、これらである。これらは完全にマルクス主義・マルクス経済学で提示されていた分析と主張である。

さらにこうしたマルクス主義・マルクス経済学で提示されていた分析と主張への比重は増し、『峡中日報』1918年8月29日では、「今回の騒擾を以て富者と貧者との間に起るべき一種の階級戦であると為す事に就ては、多くの識者は其見解を一にして居る」とまで言い切っている。本当にここまで、識者が見解を一致して米騒動を階級戦とみなしていたのかは一応措くとして、マルクス主義で示される階級闘争の論理と歩調を合わせた分析・主張であることは明瞭である。

また『山梨日日新聞』1918年8月27日では、「即ち従来の社会組織は必然的に破綻する可き運命にあつてそれが具体化されたものが今次の食料運動であるのである」と言い切っている。これは完全にマルクス主義による階級闘争による社会変革、つまり革命の筋道と論理であるのが解る。

こうしたマルクス主義の論理に各新聞が賛同しているかどうか、これも措くとして、筆者・深澤が非常に驚くのは、この当時これほどまでに、それも急激にマルクス主義による論理展開が示されてきたことである。このようなマルクス主義の論理展開がこの米騒動後の時期において、各新聞こぞってと言っていいほど急激に流布したのはなぜであろうか。その即断的な回答として、1917年でのロシア11月革命の影響だと片づけてしまうのは早計である。

と言うもの、ロシア11月革命それ事態に関する新聞報道での評価は、単に過激派レーニン無政府党による国家破壊行為という理解が一般的であり、革命勃発当時マルクス主義との詳しい因果関係はさほど理解され把握されていなかったのである。（この点の詳細に関しては、深澤〔2022d〕を参照。）また後年マルクス主義・マルクス経済学の泰斗となり、そのプロパガンダの役割を果たしていく河上肇であっても、（筆者・深澤は本稿でのこうした地域・地方紙の研究と同時

に、日本におけるマルクス主義・マルクス経済学の受容過程・展開過程を研究対象としているが、) 河上肇のマルクス主義・マルクス経済学の研究はこの1918年8月の時期では、途に就いたばかりである。(この点の詳細に関しては、深澤〔2019a, 2023b〕を参照。本稿で対象とした時期での河上肇の著作活動は、1916年9月からの「貧乏物語」の執筆連載が有名。)

さらにロシア11月革命以前の状況から考えてみると、上記の階級闘争の理論として有名なのがマルクス・エンゲルスによる『共産党宣言』で、これは1904年に堺利彦・幸徳秋水によって訳され出版されている。これらなど当時の日本の社会主義者によって、社会主義またマルクス主義の日本への導入・紹介はなされており、それらについての一定の理解も少数ながらあった。が、しかし1910年の大逆事件で社会主義自体が危険視され、その後、社会主義関係はいわゆる「冬の時代」となって、逼塞状況にあった。(この点の詳細に関しては、深澤〔2018, 2022b〕を参照。) さらにその後、上記示したように、1917年のロシア11月革命に関してはかような理解把握であったから、1917年のロシア11月革命後にいきなりマルクス主義の詳細な研究が急激に進んだとは考えにくい。しかるに、その後一年もたたずに生じた1918年8月の米騒動に関して、これをマルクス主義的な理解把握によって、純然たる階級闘争だと多くの識者が見解を一つにしたとまで表現されているのである。

あらためて、このようなマルクス主義の論理展開が、この米騒動後の時期において、各新聞こぞって急激に流布したのはなぜであろうか。自然発生的なものであったとは、もちろん考えにくい。そうではなくて、もちろん翻訳などを通じて日本に導入されたのであろうが、「冬の時代」の最中やロシア11月革命後の数か月で、マルクス主義が滔々と日本に導入され理解されていったとも考えにくい。新聞の論説にあたる有識者たちは、その期間中あたかも「隠れキリシタン」のように、マルクス主義を研究していたのであろうか。これらの追究と詳細に関しては、筆者・深澤の今までの研究では残念ながら把握しきれていないところであって、今後の研究課題とするしかないようである<sup>4</sup>。

<sup>4</sup> この対象課題に関しては、深澤(2023b)で詳細に扱っていった。

ともあれここで明確になったこと、そして理解し注意しておくべきことは、再度の繰り返しにもなるが、1917年のロシア11月革命後ではなくて、本稿で対象とした1918年8月の米騒動の後に、マルクス主義的な理解把握、特に階級闘争に関する分析把握が各種新聞紙上で共通に示され出したということである<sup>5</sup>。

#### 4-6. その後の展開④ 甲府の米騒動（若尾邸焼き討ち事件）関与者の裁判による判決

甲府で生じた米騒動・若尾邸焼き討ち事件の被告人は合計18名。彼らは裁判にかけられ、第一審の判決が1918年11月8日に甲府地方裁判所で出されている。求刑としては死刑もあったが、懲役14年から無罪の判決が18名各人になされている（『山梨日日新聞』1918年11月7日、なお判決の詳細については、井上・渡部〔1960〕22頁に記されている。ただこちらの資料では、被起訴者の合計は22名となっている）。

それによって判決が確定した者もあるが、刑を不服とした者10名がその後控訴している（『山梨日日新聞』1918年11月13日）。その後の控訴審での判決は、1919年の5月17日に判決が言い渡されて、原審懲役14年の者は10年に、原審懲役12年の者が15年に、原審6年の者は5年に、それぞれ減刑されたり刑を重くされたりしている（『山梨日日新聞』1919年5月18日）。その後の詳細については、筆者・深澤の2022年8月現在の把握では未確定であるが、その後米騒動の判決の記事は見られなくなることからして、推察の限りではこれをもって刑が確定したものと考えられる。なお同じく新聞報道に依るが、懲役1～2年の者が

<sup>5</sup> そうした影響を受けてか、米騒動の数か月後の1919年になると、ロシア革命に関して労働者の「相当の理解」は進み、労働者・小作人の「自覚」を促し、そしてまた社会主義的思想中心の時代が現出し、階級争闘という意識は高まり、マルクスの「労働者よ団結せよ」の一語が再び<sup>プロレタリアート</sup>民衆の標識として蘇生していった。何れにしても現代欧米の中心思潮は社会主義的思想であること、我国においても同様にマルクス全盛と、この時期ここまでマルクス主義による社会主義思想が、日本において発展と展開を示していくのである。この詳細に関しては、深澤（2023a, b）を参照。またこの後のマルクス主義・マルクス経済学を受容過程・展開過程に関しては、深澤（2019a, b, 2020, 2021a, 2022b, 2023a, b）を参照。

1919年12月と1920年2月に仮出獄を許されたという記事が、『山梨日日新聞』(1920年2月10日)に見られる。

以上が山梨県での米騒動、特に若尾邸焼き討ち事件の一連の顛末である。

### 【参考文献】

井上清・渡部徹編(1960)『米騒動の研究』第三巻, 有斐閣。

岩波書店編集部編集(1991)『近代日本総年表』岩波書店(第三版)。

中島為次郎ほか(1959)「〈座談会〉大正七年の米騒動(若尾焼打事件)を語る」(上・下)『甲斐史学』第6・7号。

深澤竜人(2018)「マルクス経済学(マルクス主義)導入時の検討——日本マルクス経済学史Ⅰ——」『山梨学院生涯学習センター紀要』第22号。

——(2019a)「河上肇のマルクス経済学への転身に関して——日本マルクス経済学史Ⅱ——」『経営情報学論集』第25号, 山梨学院大学経営情報学部。

——(2019b)「大正デモクラシー期におけるマルクス経済学の興隆に関して——日本マルクス経済学史Ⅲ——」『大学改革と生涯学習』第23号, 山梨学院生涯学習センター。

——(2020)「日本における1920年代のマルクス主義興隆の要因(日本マルクス経済学史Ⅳ)——『左傾学生生徒の手記』を中心として——」『経済学季報』立正大学経済学会, 第70巻, 第1号。

——(2021a)「在野における日本資本主義論争——日本マルクス経済学史Ⅴ——」『大学改革と生涯学習』第25号, 山梨学院生涯学習センター。

——(2021b)「日露戦争後の地域・地方民の意識——山梨県に代表させて——」『経済学季報』立正大学経済学会, 第71巻, 第1号。

——(2022a)「日露戦争後から日韓併合時の地域・地方民の意識——山梨県に代表させて——」『経済学季報』立正大学経済学会, 第71巻, 第4号。

——(2022b)「明治期における山梨県での社会主義に関する認識・理解把握(日本マルクス経済学史Ⅰ-②)——大逆事件(1910年)まで——」『山梨学院大学経営学論集』第3号。

——(2022c)「1910年代における山梨県下での農家・農民の変容」『経済学季報』立正大学経済学会, 第72巻, 第1号。

- (2022d) 「ロシア革命・シベリア出兵に関する地方新聞の報道と主張——山梨県に代表させて——」『経済学季報』立正大学経済学会, 第72巻, 第2号.
- (2023a) 「1919時点での山梨県における地主・小作人の関係について」『経済学季報』立正大学経済学会, 第72巻, 第4号 (刊行予定).
- (2023b) 「ロシア革命とマルクス主義・マルクス経済学の興隆との関連に関して——日本マルクス経済学史Ⅰ-③——」『山梨学院大学経営学論集』第4号 (刊行予定).